水産科学の分野で活躍する女性たち 34

Dynamic Women@Fisheries Science 34

役に立てる日が来るまで

高梨（永井）愛梨

岩手県水産技術センター

AIRI NAGAI TAKANASHI

Iwate Fisheries Technology Center, Kamaishi,

Iwate, 026-0001 Japan

平成 26 年度日本水産学会東北支部例会ミニシンポジウム「若手研究者によるトークセッション～東北地方における水産業の未来を考える～」に参加したことをきっかけに、今回筆を執らせて頂けることとなった。研究者としてはおろか、社会人としても女性としてもまだまだ未熟者ではあるが、水産業・漁業の現場で働きたいと考えている学生、特に女性の方々にとって、僅かでも参考になるものがあれば幸いである。

私は岩手県内の高校を卒業後、北海道大学に進学し学士課程修了までの 4 年間を札幌、函館で学んだ。大学在学中、友人に誘われて始めた溪流釣りがもとでサケ属魚類の美しさ、不思議な生態に魅かれ、4 年次の講座配属で水圏生態系保全学講座を専攻し、サケ属魚類を切り口に生態学、生理学、遺伝生態学等について考える「サケ学 Salmonology」を学んだ。

卒業研究では石川県手取川のサケを対象として mtDNA 分析による遺伝的集団構造解析に取り組んだ。サケの有する母川帰属性に起因する独特の地域集団形成機構、北海道、東北地方で大規模に展開されてきた人工孵化放流事業とそれに伴う県境を跨いだ種卵移植を焦点に、人工孵化放流事業が地域集団に及ぼす人為的影響について集団遺伝学的観点から考察した。限られた時間ではあったが、厳しく、難しく、魅力的な水産科学の世界の一端に触れた充実した 1 年だった。

卒業研究の開始と同時に付きまとう様になるのが、卒業後の進路の問題である。多くの学生が研究と就活の両立に悩む時期だが、当時就職する気は一切なく修士課程へ進むことに決めていたため、翌年の研究計画について考え始めていたところだった。ところがそんな折、地元岩手県で水産職の募集があることを知った。「今から勉強を始めたのではいくらなんでも手遅れ」「気の知れた仲間とあと 2 年、好きなことを勉強していたい」、そんな諦めと甘えの気持ちから、生まれて初めて進路に迷うことになった。就職関連の情報を疎かった私でも、県の水産職の募集が毎年あるとは限らず、あったとしても数名程度であること位は知っていた。大学卒業後は地元に戻り、水産業に関わる仕事をしたいと漠然と考えていたのだが、この 2 つの条件を満たす就職先が決して多くないことをこの時初めて身をもって知った。著しく準備不足ではあったが、チャンスがあるならばとその年に採用試験を受けることに決めた。

幸いにも採用頂き、平成 24 年度入庁、岩手県水産

技術センターに配属されて今に至る。担当業務は、「回遊性浮魚資源の試験研究に関すること」。さば類やスルメイカ等の回遊性浮魚資源について、国が推進する資源評価、漁海況予測の科学的根拠となるデータの収集・分析や、県所有の調査船による漁場調査を行っている。

水産業、漁業の性質上、調査時間帯は早朝や深夜となることが多く、担当上乘船する機会も多い。健康、体力には自信がある方なのだが、この様な不規則な勤務時間の中で体調を整えるのは案外難しかった。女性では特に、体調に周期的な変化があるのが普通であるが、調査の日程は当然それとは無関係。むしろ気にしなくてはならないのは、調査対象の水揚げ状況や天候の方である。また、乗船調査にあたっては設備面の問題に直面する場合もある。民間漁船に調査を依頼した際、船にトイレがないことを理由に乗船を躊躇されてしまったこともあった。

しかし私の場合、これらのデメリットよりも遙かに深刻だったのは、経験不足と知識不足の方だった。計画作成から論文執筆まで一連の流れを経験したのは卒業研究での一度きり、それも先生方、先輩方に手取り足取り御指導頂き初めてそれらしい形になったものだ。研究機関で働くために必要な研究者としての基礎が自分にはまるでなかった。チームの戦力になるところか、逆に足を引っ張ることの方が多く、この先自分が何かの役に立てる日は来るのだろうか、という不安が拭えなかった。よくないことは重なるもので、当時はまだ北海道で就学中だった夫の就職活動もなかなか難航しており、文字通り八方ふさがりの状況だった。

そんな時、職場の面談で上司の方にこんなことを言われた。「経験ならこれから嫌でも積める。それより、結婚しても子供が出来ても、仕事は絶対に辞めないで。女性職員が仕事を続けるための制度や体制が整備されているのだから、それを最大限活用すればいい。辞めてしまってもったいない」と。ただでさえ仕事で役に立っている実感がない上に、私生活も思った様にいかない状況において、これ以上励みになる言葉はなかった。結婚や出産を機に、自らの意思とは関係なく仕事を断念せざるを得なくなる女性がまだ多い中で、自分が恵まれた環境に置かれていることを実感した。

就職 3 年目に結婚し家庭を持つ様になったが、職場が離れているため夫とは現在も別居しており、出産・育児も未経験の現段階では、生活には特段大きな変化はない。私の様な要領の悪い人間が家庭と仕事を両立させるのは決して容易なことではないと思うが、家庭を理由に仕事を諦めることだけは絶対にしたくないと思う。県職員である以上、この先ずっと水産学研究に携わっていかれるという保証はないし、ライフイベントを機に働き方が大きく変わる可能性もある。しかしどんな形であっても、県の水産業、漁業振興に携わる一職員として役に立てる日が来るまで、諦めず仕事に食らいついていきたいと思う。